

沖縄前線へ

袂 別 の 詩

——決戦の空に急ぐ征途の遺書として——

谷 玲之介

いづこ ^{てつ} 何處ぞ 鐵と炎 ^{ほのほ} もて
^{はがね} 鋼 ^し なす詩の ^{れん} 一聯を
^{ちきゅうけづ} 地球削りて ^{きざ} 刻まんず

^{せいそうけん} 成層圏の ^{たか} 高みより
わが肉 ^{しむら} を ^{くだ} 砕きつゝ
^{きれき} 砂礫となさむ ^{しろ ほね} 白き骨。

^{せんけつ} 鮮血のいろ ^{あら} 新たなる
^{いのち} 生命の花の ^{はな} ひらくとき
^き 聞かずや ^{たけ} 猛き ^{ほめうた} 頌歌を。

^{ことば} 言葉にあらで ^{ぎんよく} 銀翼に
^{あらしほら} 嵐 ^{しゅんじ} 孕みし ^{しゅんじ} 一瞬時
^{ますらを} 丈夫のみち ^{きわ} 極めなむ。

【本作品は『蠟人形』第十五卷二号昭和一九年二・三月合併号（一九四四年）に掲載されたもの。

入営中という時期でありまた内容から見て、帝都防衛の任に当たっていた際に沖縄へ自ら志願

した事実と一致するため、この章（「沖縄へ」）で扱うこととした。】

屋根

どこまでも
屋根は追ひかけてきた
なつかしい日本の屋根
瓦や茅葺やトタンや
そして明るい^{ともしび}燈火
窓のそとで
どこまでも 　いつまでも
屋根は追ひかけてきた

しかしわれわれが船に乗ったら
屋根は遠くちひさくなるだろう
黙ったまゝ愛著^{いと}絶ちがたい屋根は
切ない姿勢で見えなくなるだらう

なつかしい日本の屋根よ
あの母のやうにほのぼのと明るい

灯の下のたのしい^{まど}團欒を
わたしはなみだぐましく擁きしめる

【この詩は、次の日程で沖縄に移動する船上から、鹿児島港を出港して家々の屋根を望み、本土に永久の別れを告げた心境を歌ったものと思われる。

日程

野戦高射砲第七十九大隊は七月二十五日千葉市国府台において編成を完了して、
八月　　一日　門司港から出港
八月　　　　　第二・第三中隊は、鹿児島にて滞在の後
八月二十三日　那覇港到着】

船上炎天

此処鹿児島湾頭
南國の夏日猛炎を滴らし
兵ら流汗と戦ふ

最後の土門司の埠頭を離れ来て
下痢と船酔と猛暑とに
瘦せたる眼
らんらんと桜島の嶮峻をうち仰ぐ

ウインチに張りめぐらせる天幕の
はためきだに絶えたりと雖も
聲なき鬪魂は寧ろ潜熱となりて
無表情なる兵の面魂と化せり

舷側に放列せる火砲
水平線を睥睨したる砲身の肌もいと暑し
上甲板の鉄板は炎をあぐ
兵ら物陰に累て横たはれば
わづかなる夢に耽り得むか

颶風圏

八月二日十二時十二分

涛漸ヤク高ク上甲板の動揺甚ダシ

時ニ澎湃タル怒涛

戎衣ヲ濡ラシテ壯快ナリ

敵潛何ゾ克ク攻撃ヲ爲シ得ンヤ

両舷ニ巍巍タル火砲放列ス

至嚴ナル監視ト

周到ナル準備ト

鋼ノ如キ精銳我ヲ

滿ヲ持シテ放タズ

悠々林ノ如く静カナリ

涛漸ヤク高ク

上甲板ノ動揺激化セリ

堂々ノ輸送船團

暗雲低キ颶風圏ノ最只中ニ

決然ト突入す